

思春期の処方箋



11



おつかたけし 大塚剛史
花まるグループの進学塾部門「スクールFC」教務部副部長

昭和59(1984)年、茨城県生まれ。筑波大学第一学群社会学類卒業。主に中学生・高校生の家庭教師を続けてきた大学時代の経験を通じて、子どもたち自身の考える力・やる気をもって物事を楽しむ力が将来の幸せにつながる痛感。花まる中等部部長。子どもたちへの指導にあたるかわら、年間500件以上行う保護者面談では「子どもの勉強に親はノータッチであること」を一貫して伝え続けている。現場での指導をもとに、中学生へのアドバイスを得意とし、子どもたちから絶大な信頼を得ている。

反抗し、秘密を持ち、葛藤で心をヒリヒリさせている思春期の子どもたち。この時期の接し方について悩むすべてのお父さんお母さんに、「花まる学習会」の講師たちが心の処方箋をお届けします。

他人の「いいね」で人の価値は決まりません。自ら考えて学んだことこそ人生の軸。

と、自分の人生に穴が空いてしまったかのように感じるのだと思います。

極端な例ですが、若者が「いいね」ほしさに「コンビニのアイスケースに入ってみた」「すし屋で醤油差しを鼻に入れてみた」というような珍奇な行動を起こし、ニュースになったのを存じの方もいらっしゃるでしょう。

なぜ彼らがそのような行動を起こしてしまうのか、そうならないためにはどうすればいいのでしょうか。

基準がないと他人に依存する

まず、なぜ彼らは「いいね」をほしがるのでしょうか。それは自分の中に確固たる「基準」がないからにほかなりません。そのため、他人の基準に依存し、他人に認められないと不安になるのです。

では、なぜ彼らの中に確固たる基準がないのでしょうか。「何が良くて、何が悪いのか」を自分で決められないのですから、問題は思っている以上に深刻です。

しかし、よく考えてみると、彼らはずっと自分で決めるに生きてきたために、何かを判断することができないともいえます。学校や塾でテストを受ければ、先生が点数をつけてくれます。それによって成績が決まるわけですから、彼らにすれば「他人」に「自分」というものが決められているような感覚を持つてもおかしくありません。

誤解のないようにお伝えしますが、勉強自体が悪いわけではありません。子どもが自分で何も考えることなく、言われたとおりにしか学ぶことができず、その仕組み自体が危ういのです。自分で考えるより、教科書に書いてあること、先生に言われたことを覚え、なぜそうなるのかは二の次である、こういう教育がまかり通っているのです。その結果、見事に「自分の頭で考えられない大人」が増えてしまいました。そして、彼らは自分の軸を持って、他人に依存するようになりました。

与えるだけが愛ではない

どうしたら、他人の基準という呪縛

「いいね」は「いい」とばかりではない

子どもが大人になっていく過程で、一つひとつ積み重ねていくもの、それが「その人自身の人生の哲学」だと私は考えています。

しかし、今の時代はこの人生の哲学、つまり「その人の生きる指針」であり「生きる上での考えの軸」が明確でない人が多いように感じます。

分かりやすい例が、フェイスブックなどのSNS(ソーシャル・ネットワーク・サービス)の投稿に、他人からの賛同や共感を示す「いいね」をほしがる人々です。「いいね」自体を否定しているわけではありません。賛同や共感が集まるのはよいことですし、そこから新しい何かが生まれるすばらしさも分かっています。

ここで問題なのは、「いいね」をほしがるあまり、本当の自分とはかけ離れた「偽りの自分」を演じなければならなくなっている人です。そういう人は、誰かに「注目されている」ことや「認められている」ことを感じられない

から逃れられるのでしょうか。答えは簡単です。彼らに人生の解答を与えるのではなく、考えさせる時間を与え、「自分の頭で考え、そして行動する経験」をさせるのです。

勉強もそうですが、普段の生活でも必要以上に大人が口出しをしないことです。子どもはもともと考えたくてしかたのない頭を持っています。それが「大人の善意」によって、どんどん抑制・抑圧されていくことで、いつしか何も考えられなくなってしまうのです。

月並みな表現ですが、魚をほしがっている人に魚を獲ってあげると一日で食べてしまうけれど、魚の釣り方を教えれば一生食べていける、ということなのです。今の時代は「待っている魚が目の前にくるはずだ」と信じ、動かない人間がたくさんいます。しかし、実はその魚を自ら手にする過程で考え、学ぶことが重要であり、それこそが人生の哲学の一端になります。

特に中学生、高校生の子どもを持つ親御さんには、魚をほしがっているわが子に対し、どう接すればいいのかわからず悩んで考えてほしいと思います。

